

明治村 だより

2001 Summer



夏号
Vol.24

名鉄沿線ご案内



目次

テニスに魅せられた明治の青春 鳴海 正泰 …… 2

館蔵資料紹介 十二
浮世絵の洋風化 芳國「京坂名所図絵」について 遠藤 照子 …… 8

蔵書紹介 六 「女性」 …… 12

ミュージアムショップから 7 …… 13

明治村花図鑑 4 アジサイ …… 14

夏の明治村 …… 15

表紙写真 シアトル日基督教教会 正面

「明治村だより」
第二十五号発行のお知らせ

発行時期 平成十三年九月(予定)

申込方法 「明治村だより」第二十五号ご希望の旨

及びご住所・お名前を明記の上、送料
一四〇円の切手とともに封書にてお
申し込み下さい。

平成十三年七月十五日発行

「明治村だより」第二十四号(平成十三年夏)

発行 博物館明治村

愛知県犬山市内山一番地

電話(〇五六八)六七〇三二四 千四八四一〇〇〇

ホームページ <http://www.meitetsu.co.jp/meiji-w/>

製作 大日本印刷株式会社

浮世絵の洋風化 — 芳國の「京坂名所図絵」について —

江戸時代に誕生した浮世絵は、庶民の人気に支えられて著しい発達をみた。明治以降、伝統的な日本画が、後盾であるところの大名や富裕な商人らの援助を失って衰退するなか、浮世絵だけはその人気を保ち続け、その題材を文明開化に求めるなどしてうまく時流に乗ることが出来たといえる。

その中でも西洋画の影響を受けて「光線画」という作品を描くことによってひととき異彩を放った絵師がいる。明治十年前後東京を中心に活躍した小林清親（一八四七—一九一五）である。清親は独学で絵を学び、横浜などで外国人から洋画の手ほどきを受けたといわれる。洋画技法の遠近法を用いることで生ずる立体感、光の描写による陰影のあらわれなど、それ以前の平板な画面とはうって変わった印象を与えた。江戸と明治が混在する東京風景を情緒豊かに描いたことで人々の人気を博した。清親の弟子井上安治や小倉柳村らの作品群も同様の画風であることは知られている。

こうした東京の流行から数年を経て大阪でも洋風浮世絵が生まれた。明治十八年「京坂名所図絵」というシリーズを描いた野村芳國である。「上方の清親」ともいべきこの画家の出自は詳しく分かっていない。

野村芳國は、安政二年（一八五五）京都に生まれ、本名与七、一陽亭・笑翁と号した。芳國の名前を持つところから大阪で歌川國芳の流れを受け継いだ歌川芳梅の門人と思われる。当時上方浮世絵界ではこの國芳派と國貞門下が勢力を二分していた。画面の余白に「京都下京五組円福寺前町二十二番戸平民」とあるので、京都に住まいを定めて活動したもようである。

作品は前述の「京坂名所図絵」の外には知られてなく、その生涯の経歴は不明なところが多い。この図絵にしても全部で何枚刊行されたかわかっていない。知られているものは二十三図で、当館ではこの内十一図を所蔵している。これは数年前に当館に寄贈された岡

コレクシヨンの中に含まれていたものである。順次各図を紹介するが、その構図、巧みな光線の捉えかたなど、どれをとっても清親の及ぼした影響が強く感じられよう。ただ清親と異なる点は、芳國独特の色使い—これは上方絵の一般的な特徴でもあるところのやや濃いめの色である—と、ポンチ絵風の筆致が強くややバランスを欠く人物描写、細部の緻密な描き込みなどがあげられる。

二十三図のうち大阪名所が十三図、京都名所が十図である。館蔵では大阪七図、京都四図である。名所をシリーズ絵にするのは、我が国では十八世紀の末に描かれた「都名所図会」が最初といわれる。諸国の街道が整備され、交通手段の発達により各地へ旅することが可能になった時代、名所絵はそうした見知らぬ土地、景勝地・名所といわれる場所を見てみたいという人々への貴重な道標ともなった。

まず大阪の名所から見てみたい。寺社仏閣に限っていえば今でも名所とされている所も多い。

「大坂天王寺(村)清水之図」

現在では天王寺界隈は繁華街のひとつであるが、明治十八年頃はこのような荒れた寂しい場所であつたらうか、当時の風俗として人力車を配しているが、車夫の影が暮れなずむ田園風景をより効果的にきわだたせている。



大坂天王寺(村)清水之図

川延若である。延若は和事の名手として京坂三羽鳥の一人であった。上方芝居絵の伝統的な描法で、濃く厚く色彩を重ね羽織の文様にも緻密な描き込みがみられる。

「大坂四天王寺(之)風景」

その昔聖徳太子が建立したという古刹で現在も拝観者が絶たないが、この寺で落日を拝し西方浄土を念じることが流行した。落日がもたらす光の反射の描写が仏教的で荘厳な雰囲気をよくあらわしている。



大坂堺町慈安寺妙見(堂)之図

「大坂堺町慈安寺妙見(堂)之図」

芝居絵のように役者の死絵と寺の夜景を組み合わせている。画面に書かれた文字によると、中央に大きく描かれた、桔梗と数珠を持った人物は、明治十八年に亡くなった初世実

「ばんば」は馬場のことで、大阪城の敷地には陸軍省の営舎があった。強風に飛ばされる布のようなものがいきいきと描かれて動きのある画面を生み、加えてポンチ絵風の人物によって全体的に漫画的な面白さを感じられる。

「大坂木津川口さばの尾之図」

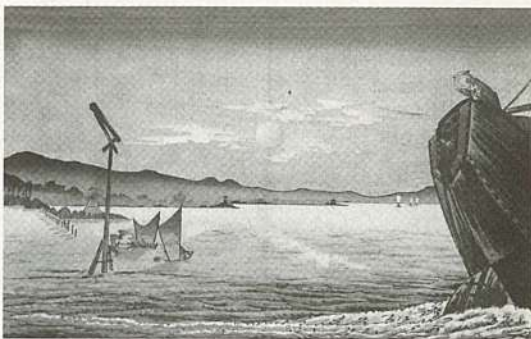
木津川は伊賀の山中より流れ出て淀川と合流する河川で、大坂湾に注ぐ河口付近を描いた図。海に映える夕日の光がまるで写真を見ようように巧みに描かれている。さばの尾は鯖



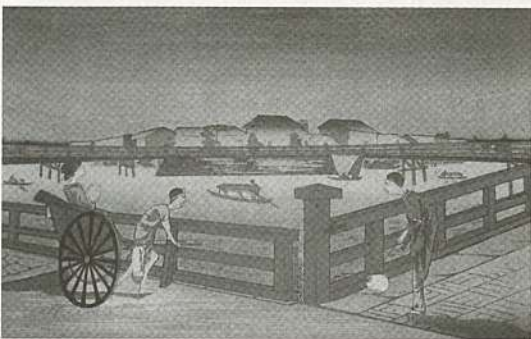
大坂ばんば之図



大坂四天王寺(之)風景



大坂木津川口さばの尾之図



大坂四ツはし之図



大坂松島郭出火之図



京都平野神社ヨサクラ之図

尾であり、この地形が鯖の尾鰭に似ているところからこう呼んだと思われる。

「大坂四ツはし之図」

四つ橋は、西横堀川と長堀川と十字に交差する所にあつて「上繫橋」「下繫橋」「炭屋橋」「吉野屋橋」の四つの橋が井の字の形に架っている。川や橋の多い大坂の町並みの中でも唯一の奇観である。江戸時代の「撰津名所図会」にも四つ橋景観と紹介されているほどの名所で、昭和初年に鉄筋コンクリート製の橋に架け替えられるまではずっと木橋であつた。夕景であろうか車夫の腰提灯の灯りだけが光の

点描のように情緒を醸し出している。

「大坂松島郭出火之図」

港と川口居留地の開設がきっかけでつくられたもので、明治十八年に大火があつた。炎の描きかたが、清親の作品と同じように斜めに走っているのが特徴的である。従来の日本画の描法と明らかに異なる西洋技法を取り入れている。

「京都平野神社ヨサクラ之図」

京都の桜の名所はいろいろあるが、この神社も古くから京都の花暦に数えられ、北野神

「京都西大谷眼鏡橋之図」

西大谷は東山五条にある西本願寺の廟所のことで、洛東の景勝地として夙に知られている。見晴らし台に御簾がかかっているところから夏場であろうか、夕日に照り映える山と

池面に映された花崗岩の眼鏡橋が写実的に描かれている。図にあるように蓮を多く植えてあり、花の季節は雑踏を極むと明治年間に発行された名所案内にも書かれている。

「京都東福寺通天橋之図」

京都洛南の古刹東福寺は紅葉の名所として知られている。紅葉と橋を遠景に置き手前の人物に焦点をあてて奥行きを感じさせている。

「京都祇園南門之図」

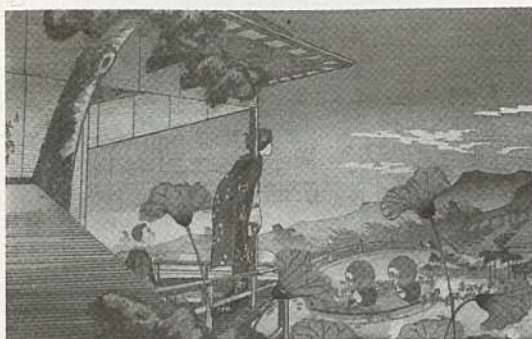
両脇に柱のみを強調するという斬新な描きかたをもつて空の面積配分を広くし、見る者

の眼を必然的に引き込む画面である。

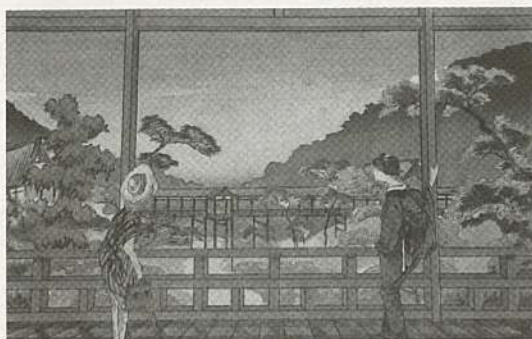
このほかに「大坂江之子島政府之図」、「大坂天神橋大湖水之図」、「大坂梅田ステンション汽車之図」、「大坂葎屋橋蒸気出帆之図」、「大坂河崎造幣寮之図」、「大坂松島松ノ華風景之図」、「京都御所雨中夜之図」、「京都従三条大橋東山大文字遠観之図」、「京都東山清水寺雪中之図」、「京都大仏豊国神社之図」、「京都大社下鴨神社之図」、「京都落西金閣寺之図」があり、古くからの名所のほかに明治時代に新しく建設された西洋館や、SLなども描かれている。芳國は、この一連の作品を遺したほかには

知られておらず、晩年は劇場の看板絵師となり、明治三十六年（一九〇三）没している。油絵のような純粋な西洋画がまだ発達していない時代、こうした洋風浮世絵が興味をもつて多くの人々に受け入れられたということは、かつて一部の特権階級の趣味であつた美術鑑賞が、真の意味で広く一般に普及しつつあつたと考えられる。さまざまな分野での革新かつ過渡期であつた明治時代であるからこそ必然的に生まれた画期的な浮世絵といえる。

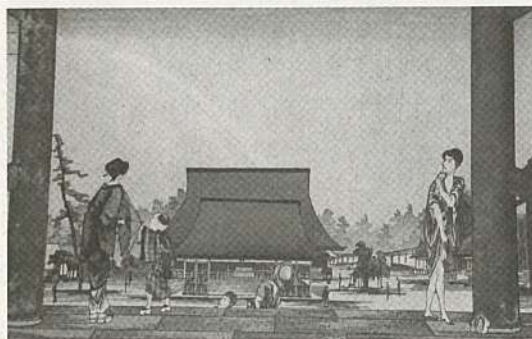
遠藤昭子（当館学芸員）



京都西大谷眼鏡橋之図



京都東福寺通天橋之図



京都祇園南門之図

蔵書紹介 ⑥ 女性

二十一世紀を迎えた今日、社会生活における女性の進出はめざましいものがあるが、かつて『二十世紀は婦人の世紀』という言葉巻頭に掲げた婦人雑誌が存在した。大正十一年五月、プラトン社より発行された月刊「女性」である。

当館所蔵成瀬文庫に収められているこの雑誌は、当時としては新しいタイプの婦人雑誌であった。「女性」は創刊号から十三巻第五号（昭和三年五月）まで全部で七十二冊発行された。創刊号の目次を見てみると、小説などの読み物は比較的少なく、婦人問題の種々相、婦人となる前に人間となれ、女学生の今昔など短い評論やエッセイなどで占められている。しかし次第に作家による小説と戯曲が紙面の大半を占めるように変わっていった。号を重ねるにつれ頁数も倍近くに増え、大正十五年三月発行の第九巻四号には、二十数名の作家と十人の関秀歌人

の創作が掲載されており、当時の婦人雑誌には珍しくミステリー作品の連載も見られる。

そもそも一般向けの婦人雑誌は明治三十六年に創刊された「家庭之友」（明治四十四年、「婦人之友」と改題）を皮切りに「婦人画報」（明治三十八年）、「婦人世界」（明治三十九年）などが次々出版され、大正時代半ばには二十数種類の雑誌があふれていたが、大抵は娯楽や生活実用記事が中心であった。発行所のプラトン社は、クラブ化粧品で有名な中山太陽堂（創業明治三十六年）の創業者中山太一の弟、豊三が興した出版社である。この「女性」は当初クラブ化粧品のPR誌として企画されたものであるが、それにはあまり広告費も多くなく、純粹

な文芸雑誌としての方針を打ちだした。

劇作家小山内薫が顧問として参画し、実質的に紙面編集に携わった二号からは、益々こうした傾向を強め、馬場孤蝶・岡田八千代・生田春月・泉鏡花・正宗白鳥・田山花袋・里見弾・永井荷風・坪内士行・小宮豊隆・吉井勇などそうそうたる顔ぶれの作家が名前を連ねるようになった。

又表紙をはじめ挿絵のデザインの美しさにも注目できよう。アール・デコ様式のファッション画やタイトル文字は、大正モダニズムの流行を感じさせる。これらのデザインの多くは、フランスのファッション・プレートを手本に描かれたが、当時としては都会的な雰囲気をもたらした垢抜けた表紙である。かつて本は高価なものであったので、気軽に読めて安価な雑誌が巷に流行した所以である。雑誌は読者の嗜好に因るため、その時代の流行に合わせた紙面作りが主流である。従って当時の思想や社会風俗を知る上でも恰好の研究材料といえる。高級文芸誌として登場した「女性」は、新時代の先端をゆくものとして高く評価されるであろう。



ミニチュアムシヨップから ⑦

これまで何回かにわたり明治村のミニチュアムシヨップをご案内してきましたが、今回をもつて最後となります。

展示建造物⑩東山梨郡役所の中に「アートシヨップ」があります。明治村の通称レンガ通りの突き当たり、展望のきく場所に立地する郡役所は、白壁と黒漆喰の隅石積のコントラストが

美しい洋風建築で、昭和四十一年に重要文化財に指定された建物です。

この「アートシヨップ」は竹久夢二の版画やグッズ、キューピー人形、唱歌、文具、和紙製品、お香など生活に身近な小物など百種類以上の商品を扱っています。

竹久夢二は美人画で有名な版画家ですが、彼

の描いた大正浪漫あふれる独特の画風は今でも根強い人気を持ち続けています。夢二は大正三年、東京日本橋に「港屋」という小間物屋を開き、版画をはじめ自らデザインした文房具や半襟などを売っていました。当時この店は少女たちに人気を博し、店に置かれた商品は飛ぶような売れ行きであったとか。しかし商品の補充が追いつかず二年余りで閉店となりました。

明治村でも夢二の作品として印刷版の小さな額（三二五〇円）から大判の木版画まで多くを取り揃えています。木版は一枚一

枚手刷のため一点数万円から数十万円と高価ではありますが、刷りや色彩の美しさは価値のあるものだと思います。版画の他に夢二デザインのレターセット（四八〇円）、一筆箋（四八〇円）などが人気です。和紙製品のコーナーでは、美濃和紙のミニタペストリ（二〇五〇円）が好評で、小さな一輪挿しがついていてちょっとした部屋のアクセサリに楽しいものです。

キューピー人形は、セルロイドの発明とともに造られるようになった新しい玩具で、大正年間には童謡にまで歌われるほどの人気商品でした。

このシヨップでは大きなキューピーより手頃な可愛いキーホルダー（二二〇円・二七〇円）に人気があるようです。

唱歌の本やCD、童謡「赤い靴」に因んだブローチなどのグッズも取り揃えています。落ち着いた雰囲気の中で夢二の絵を鑑賞しながらゆっくりお選び頂けたらと思います。



明治村花図鑑

4

アジサイ

今回は初夏の花アジサイをご紹介します。梅雨時に咲く白・青・紫・ピンクなど色とりどりのアジサイの花は、雨にぬれて花びらに露を溜めているさまは、なかなか風情があるものです。アジサイは渡来種でなく古代から我が国にあったようです。原種ガクアジサイはユキノシタ科の落葉低木であり、元来山の中に自生していますが、高さは二メートル位になり、花は中心に細かい両性花をつけその周囲に少数の大きな装飾花をつけます。普通に言うところのアジサイは、このガクアジサイを母種として日本で生まれた園芸種で、一般に広く栽培されているものです。



「アジ」は「アツ」で集まるの意、「サイ」は真藍の約したもので、青い花が集まって咲く様子からこの名前が付けられたという事です。アジサイは花の色が変わることか

ら無節操であるとか縁起が悪いとか言われあまり人気になかったようですが、十九世紀に来日して「日本植物篇」を著わした医師シーボルトは、アジサイの美しさに注目し、彼の日本人妻お滝の名前から「オタクサ」という学名をつけたという話は有名です。桜や梅と異なり、歌などに詠まれることは少ないですが、工芸的な分野、例えば象眼蒔絵などにアジサイのモチーフがよく見られます。今では花の色が変わることがかえって神秘的とされ、日本各地にアジサイの名所がつけられているようで梅雨の合間に訪れる人が跡をたちません。

明治村に植栽してあるアジサイは一般の園芸種で、数はさほど多くありませんが、⑦学習院長官舎付近、⑳名古屋衛戍病院の北側などにあります。日当たりのよい場所は適さないもので、日陰の植え込みなどに配しています。白漆喰の壁には一番映えますし、落ち着いた木造建築にもアクセントとして彩りを添えています。梅雨は鬱陶しい時期ですが、咲き乱れるアジサイの花を一眼の清涼剤として楽しんで頂きたいと思えます。



夏の明治村

平成13年7月20日(祝)
～9月2日(日)

ヒロブミの夏休み

特別企画 明治に学ぶエコライフ

会場：村内各所

展示建造物に明治時代の夏の生活空間を再現し先人の智慧を紹介するとともに実際に体験してもらうコーナーを設置。

盛夏の味覚

会場：和食処「碧水亭」 洋食屋「浪漫亭」

夏ならではの味覚を盛り込んだメニューを用意。

ナイターは納涼天国

8月11日(土)～17日(金) 夜間9時まで開館

建物ライトアップ

帝国ホテル中央玄関・内閣文庫・宇治山田郵便局

浴衣の女性は入村無料

※催事は都合により変更する場合がありますので、詳細については事前にお問合せ下さい。

- ホラーナイト3Dシアター「霊幻遊戯」
会場：宮津裁判所法廷（有料）
- ホラーハウス「明治の監獄ものがたり」
会場：沢監獄中央看守所・監房
- ピアホール「Yah! Yah! Yah!」
会場：名鉄岩倉変電所
- 監獄レストラン
会場：前橋監獄雑居房

編集後記

十年ほど前、世界中がコロナーズ、エバート、マッケンロ、ピョン・ボルグらの華麗な活躍に酔い、テニス全盛になってきた頃、財団法人明治村の先々代理理事長で哲学者故谷川徹三氏が、ある会で楽しみに話した昔話のひとつにテニスの事がありました。「一高在学時代（大正初年頃）、のことであるが、友人と語らって学校でテニス同好会をつくった。その頃はまだ学生の気質としてはパンカラが主流であったため、破帽姿の学生から「軟弱な奴等」と罵られコートに汚物を撒かれた。」と。今号では明治のテニス事始めについて、関東学院大学教授であり横浜山手テニス発祥記念館の館長も務められている鳴海正泰氏にご執筆いただきました。昔も今も若者にとっては魅力的なスポーツに変わりないようです。明治村はこれから夏の盛りを迎え、木々の緑も色を一層濃くして涼しい木陰を作り出す。自然の涼しさには冷房と違って格別なものがあります。暑い時期ではありますが、皆さまのご来村をお待ちしています。